

長期入院中の子どものストレスを軽減する試みが、横浜市立大学医学部付属病院（横浜市金沢区福浦）で行われている。犬に触れ合うアニマルセラピーという手法で、小児科病棟では全国で3例目、県内では初の取り組みだ。2カ月に1回の「友達」の訪問を、子どもたちは心待ちにしている。（北川 文）

院内学級の一室に20日、大型犬のバーニーズマウンテンドッグから小さなチワワまで8頭の犬がやって来た。ほえることもなく、皆おとなしい。

「たくさんなでてあげてくださいね」。それぞれの飼い主が犬の名前、性別、癖などを紹介する。小さなハードルを跳び越える得意技を見せる犬、子どもからお菓子をもらい、しっぽを振る犬。経験のある子も、2カ月ぶりに会うためか、心なし残っていた緊張が顔から消え、穏やかな表情になった。

アニマルセラピーは2回目という女兒（9）は前回会ったバーニーズマウンテンドッグを指名し、病室に来てもらった。「大きくてかわいかった。また来てほしい」。柔らかな毛を何度も

犬と触れ合うアニマルセラピー

なでた。「自宅で犬を飼っているが、写真などを見ると余計に会いたくなるみたい。この行事をすごく楽しみにしていた」と母親は話す。

アニマルセラピーは、公益社団法人・日本動物病院福祉協会（JAH A）が行う。一般家庭で飼われている犬と、飼い主約1500人がボランティア登録する。1986年から活動し、主に老人福祉施設などを訪問してきた。

小児科病棟への訪問は、8年前の聖路加国際病院（東京都中央区）が初めてだった。

犬には、腸内や口腔内の細菌検査や去勢手術などを受けさせ、前日にはシャンプーと歯磨き。セラピー直前にも、獣医師による健康チェックが必ず行われる。

犬に触れ心癒やす



犬に触れ、笑顔を見せる子どもたち
—横浜市立大学医学部付属病院

県内初 長期入院の子どもにも

免疫力の落ちた患者と触れ合うため、ほかにもさまざまな基準が徹底されている。聖路加では、一度も感染症は発症していないという。白血病や小児がん、小児リウマチなどの病気と闘っている子どもたちは長期入院が必要だ。アニマルセラピー導入を市大病院に提案した、横須賀とも子医師（35）は「学校を1年間休んだら、子どもたちは退屈してしまう。定期的に来てもらうことで楽しみに待つ子どもたちの姿を見たかった」と話す。5月から始まり、今回で3回目。当日の朝、待ち切れずに早起きする子どももいる。

問でもある柴内裕子さん（75）は、犬と接すると緊張がほぐれ、思いを表現しやすくなる、と子どもたちの変化を説明する。「普段は医師から治療を受ける立場だが、自分が犬を散歩させたり、餌をあげたりすることで達成感を得られる。子どもたちには、そんな喜びを体感してほしい」

獣医師で、JAH Aの顧問